

【資料紹介】

林茂生「基督教文明史観」（1932-3）を読む

三野和恵
(京都大学大学院)

本稿は、日本植民地支配下台湾の知識人である林茂生（1887-1947）の白話字論考「基督教文明史観」を和訳し、紹介する。1932年から33年にかけて『台湾教会公報』に連載された同資料は、「キリスト教文明」即「西洋文明」という先入観を問い、諸文化の連動と衝突を通して形成されてきたヨーロッパ世界の物質的、精神的文明の特質を丁寧に解きほぐすものである。諸文化の差異を「人種」的差別と同一視せず、キリスト教もまた一つの文化的要素として扱う同資料は、当時の台湾人信徒自身によるキリスト教理解や、宗教的アイデンティティとその社会状況への関与の分析に対してだけでなく、諸文化の敵対関係の深刻化という現代的課題に対しても十分に示唆を与えるものであると考える。

I. 林茂生と「基督教文明史観」（1932-3）—概観—

本稿は、日本植民地統治下台湾の知識人である林茂生（1887-1947）の著作、「基督教文明史観」を紹介する。清末期台湾の読書人であり、1898年の受洗以来、南部長老教会の本地人リーダーとして活躍した林燕臣（1859-1944）の長男であった林茂生は、幼い頃より漢学を学び、キリスト教信仰や近代西洋の学問の素養を身につけた。1904年に台南長老教中学に就学して優秀な成績を修めた彼は、1908年からは教会の支援により留日、同志社中学、第三高等学校を経て、1916年に東京帝国大学文学部哲学科を卒業した。帰台後、台南長老教中学の教師兼教頭となり、1918年以後は台南師範学校や台南商業専門学校での教授を務めたが、長老教中学とは密接に関わり続け、20年代半ばには同校の正式認可実現のため寄付金の収集に奔走した。1927年には台湾総督府在外研究員としてコロンビア大学に留学し、29年には博士論文「Public Education in Formosa under the Japanese Administration: A Historical and Analytical Study of the Development and the Cultural Problems」を提出した。彼は台湾文化協会（1921）にも関与し、23年からは同協会が基督教青年会名義で開催した講習会にて、24年からは霧峰林家にて開催された「夏期学校」にて「哲学」や「西洋文明史」の講師を務めた¹。

「基督教文明史観」は、1932年6月から33年10月にかけて台湾基督長老教会の定期刊行物『台湾教会公報』に連載された（表1）。台湾で広く用いられる閩南系台湾語をローマ字表記した「白話字」を出版言語とする同紙は1885年にイギリス人宣教師が創刊し、伝道、信徒教育、及び信徒間の共同意識の醸成に対する重要な役割を果たした。同資料に着目する先行研究には、

張妙娟《臺灣教會公報》中林茂生作品之介紹(2004)²及び林茂生を含む日本統治時代台湾のキリスト教知識人と、1920-30年代の抗日社会運動との関係进行分析する王昭文〈日治時期臺灣基督徒知識分子與社會運動(1920-1930年代)〉(2009)がある。同資料で林茂生は「キリスト教の文明は崩壊するだろう」という当時「よく聞かれるようになった」言葉を出発点に、

表1. 林茂生「基督教文明史観」の連載状況

連載順	《臺灣教會公報》		
	連載巻号発行年月	連載巻号	掲載ページ
1	1932年	6月	第567巻 pp.10-11
2		8月	第569巻 pp.8-9
3		9月	第570巻 p.7
4		10月	第571巻 p.8
5		11月	第572巻 p.8
6		12月	第573巻 pp.9-10
7	1933年	1月	第574巻 pp.9-10
8		2月	第575巻 pp.10-11
9		4月	第577巻 pp.8-9
10		5月	第578巻 pp.8-9
11		6月	第579巻 pp.9-10
12		7月	第580巻 pp.10-11
13		8月	第581巻 pp.8-9
14		10月	第583巻 pp.10-11

(1)「キリスト教文明」がいかなるものであるのか？(2)その「崩壊」は何を意味するのか？(3)またそれは本当に「崩壊」し得るのか？という三つの問いに沿って議論を展開することを目指した。しかし、同資料は第一の問題の考察の途中で未完に終わっている。林茂生は「キリスト教文明」と「西洋の文明」が必ずしも等しいものではないことを強調し、後者が(1)ゲルマン族の文化、(2)ギリシア文化(3)ヘブライ文化の三要素の間の連動や衝突の中で変遷し、形成されてきたことを論じている³。いくつかの章節に分けて展開される同資料の文体は明快であり、「phiau-pong²(標榜)」や「kok-ka choo-chit(国家組織)」など日本語にも共有される漢語が多く用いられている。

一方、同資料の議論には、アフリカや古代ヨーロッパの民族の「幼い」文化と「中国、インド、日本、朝鮮のような[...]固有の民族性、固有の古い文明のある国」との区別、物質的な捧げ物によって救済を確保しようとする「低級」な贖罪観と、より抽象性が高い「精神的」な贖罪観との区別など、当時欧米世界で広く共有されていた啓蒙主義的な序列関係の認識を踏襲する点が見られる⁴。しかし彼がこれらの区別を「人種」の性質へと回収させない点、キリスト教文明を一つの文化的要素として扱い、それを絶対化しない点を鑑みれば、上記のような語り方が漢族キリスト教徒としての優越意識を示すものではないことが窺われる。この点については、林茂生の博士論文を読み解き、彼の植民地教育批判が、近代教育とは「子どもの創造的な力」を損なわずに「内側から個々人を発達させる」ものであるという理念に立脚していたと指摘する駒込武「植民地支配と近代教育-ある台湾人知識人の足跡-」(2003)が示唆的である。駒込は、上記のような林茂生の姿勢を「帝国主義に抵抗するナショナリズムの表現であると同時に、ナショナリズムそれ自体をも相対化するヒューマニズムに対して開かれたもの」であると捉えている⁵。

キリスト教のアイデンティティとその状況への関わり方の問題に着目する筆者は、在台イギリス人宣教師キャンベル・N・ムーディ(Campbell N. Moody, 1865-1940)、及び1920-30年代台湾人信徒のキリスト教理解とその変遷を考察してきた。一方で、林茂生の「基督教文明史観」は、1920年当初から台湾や中国など各宣教地で問われ、また近代キリスト教海外宣教運動史研究においても注意深く検討されるべき、キリスト教と「近代」及び「文明」の関係の問題を、

当時の植民地的状況を生きた台湾人自身が正面から取り上げた資料である。林茂生にとっての「文明的」あるいは「キリスト教的」なるものとはいかなるものであったのか、その認識が彼の言動といかに関係したのかを示す同資料は、当時の長老教会組織や抗日社会運動において彼が担った重要な役割を踏まえれば、上記のムーディや台湾人信徒に対する考察を深める上でも示唆的である。日本植民地支配下台湾という文脈において、台湾人キリスト教徒知識人・林茂生が、何が本当に「キリスト教的」なるものであるのかを見極めようとする中、同時代のムーディや台湾人クリスチャンはいかなるキリスト教理解にしたがってそれぞれの伝道論を展開し、教会自治志向を提示したのか。今後は、これらの問題への考察を、林茂生のケースに照らし合わせて深めたい。

以下に、筆者による和訳版の林茂生「基督教文明史観」を紹介したい。翻訳文の作成に当たっては三野璧如氏の協力を得たほか、上述の王昭文の博士論文巻末に附されている中文版を参照した。翻訳に確証がない箇所には【 】を、訳者による補足部分には〔 〕を付し、翻訳不能の箇所は□□と表記した。

II. 林茂生著「基督教文明史観」の紹介

(1) 1932年6月（第567巻）、pp.10-11。

基督教文明史観

I. 序

「キリスト教の文明は崩壊するだろう」。近来、このような言葉がよく聞かれるようになった。つい最近にも明石順三という人が台湾に来て、あちこちでこの題目を宣伝していた。このテーマはとても人の耳に響くので、どこでも多くの人々が彼の講演を聴きに行く。彼自身が標榜して言うには、彼は「エホバの証し人」であるが、ある人が言うには彼はユダヤ教を信じる者だということだ。もしも彼がユダヤ教徒であれば、キリスト教の文明を攻撃するのは何ら不思議なことではない。しかし、私がこの小論文を書くのは、彼の主張に反駁したいからではなく、以下に述べる目的による。私は、歴史的な根拠を用いて以下の三つの問題について説明したい。すなわち、

- (1)キリスト教の文明とは何か？
- (2)キリスト教の文明が崩壊すれば、人類にはどのような結果がもたらされるのか？
- (3)キリスト教の文明は、本当に崩壊するのかどうか？

II. キリスト教の文明とは何か？

多くの人々は、キリスト教の文明とはすなわち「西洋の文明」なのだと誤解している。その上さらに、西洋の人は一人一人がすべてキリスト教徒だと思い込んでいる。この誤解のために、西洋の社会が徐々に衰えたり、以前のように発展しなくなったのを見て、あるいは西洋人の多くがキリスト教の教えを顧みないのを見て、一本の竹竿で一艘の船をひっくり返すように「キ

リスト教の文明はもうすぐ崩壊するぞ！」と言うのである。そのため、我々の問題を明確化するためには、まずはキリスト教文明の本質を理解することが重要である。

歴史上から見れば、西洋の文明には三種類の要素がある。(1)ゲルマン族の文化、(2)ギリシア文化、(3)ヘブライ文化である。さてここで西洋の文明を一人の人間に例えると、ゲルマン族の文化はこの人の肉体であり、ギリシア文化はこの人の頭脳で、ヘブライ文化こそがこの人の良心であると言える。この三つはいずれも、全体の人として見れば、全体と部分の関係にある。言うまでもなく、部分は全体に対して密接な関係にあり、全体を示してこれが〔ある〕部分だと言ったり、〔ある〕部分を示してこれが全体だと言ったりすることはできない。人は、時には肉体と頭脳が非常に発達しているのに、良心の力はそこまで強くないこともある。また、人は時には身体があまり発達していないが、頭脳あるいは良心が発達していることもある。要するに、この三種は、同時に同じように発達するとは限らず、また人も同じように発達するとは限らないものである。したがって、歴史上から西洋の文明を見るときにも、このような現象が存在する。あることからすべてを断じようとする、あるいはすべてからあることについて断じようとすることは、非常に危険なことである。

東洋人が西洋人と接触して一見すれば、彼らの進取的な様子と尚武勇敢な精神を見出す。この性質はまだヘブライ文明、すなわちキリスト教の文化に触れる以前に生まれたものだ。これは有史以前にゲルマン族から伝来した特質である。この特質があるために、彼らは比較的荒れた土地に住んでいたにも関わらず、何千年来、あるいは何万年来、深山の野獣と戦い、海と格闘して、生活に役立つ道理を研究し、植民地を開拓し、現在の西洋文明における、物質的方面の文明を建設してきた。一人の人に例えて言えば、父母に生み育てられた勇壮な身体は、大きく頑丈に育ったと表現できる。また荒れた土地に生まれ、やむを得ず一生懸命に働き、ついにこのような大家業を築いたのだと表現できる。この方面の西洋文明とキリスト教文明の間には、それほど密接な関係は存在しない。

(2) 1932年8月(第569巻)、pp.8-9。

ギリシア文明は、現在の西洋文明においても非常に重要な位置を占めている。「ギリシア文明」と一言で言うものは、その実、より詳細には「ギリシアとローマの文明」を包括して言うものである。なぜなら、歴史に照らしてみれば、この二つは一つの系統上にあるからである。その中でも代表的である方〔の名〕を選び、それを包括させているのである。

ギリシア文明は、現代西洋文明に対してどのような影響を与えたのか？二つの方面、すなわち、(1)精神文化の方面、(2)物質科学の方面から見ることができる。

精神文化について論じれば、普通に考えれば、キリスト教文化が西洋の精神文化なのではないか？と思われるだろう。〔しかし〕私はここで敢えて強調したい。西洋の精神文明を歴史的に見れば、それはキリスト教に属するものではない。それはすなわち、古代ギリシア文化に属するものである。学者が言うには、現在西洋の精神文化は、哲学、文学、芸術、政治、法律であると、今流行っている社会科学であるとを問わず、一つとして古代ギリシア、ローマを師と

仰がないものはない。その精神文化の本質と内容がギリシア・ローマから伝来しただけではなく、その論のたて方、すなわち弁証の確実さ、組織の整然さもまた、すべて古代ギリシア、ローマの感化を大きく受けたのである。

一例を挙げれば、東方人が西洋人と接すると、その人は西洋人が非常に個人の自由を重んじていることを見出すであろう。この自由、すなわち思想上の自由があるので、彼らの芸術、哲学、および政治、社会思想の発達は、未だに一時も止まったことがない。さて、この自由を重視する精神はどこから来たのか？これは古代アテネ市の影響、すなわちギリシア文化の影響であるとすぐにわかる。しかし、また別の方面から見れば、西洋の国境に一步踏み込むと、彼らの国の政治と法律の組織、秩序が非常に整然としていくとすぐにわかる。さてこの秩序はどこから来たのか？その源の大部分は古代ローマ文明の感化による。なぜなら、古代ローマ国の国家組織と法律は、とてもよく完備されており、現代西洋列国の手本として残っているからである。

しかし私は西洋の精神文化はギリシア・ローマの感化だけを受け、他の影響を受けていないと言うのではない。またある部分、すなわち宗教道徳の部分がある。これはヘブライ文明に属する。すなわち、キリスト教文明の範囲内にあるのであり、これについては後に詳細に論じることとする。ここではまず、主に西洋でも比較的キリスト教の感化に属さない部分を〔キリスト教の影響を受けている宗教道徳の部分〕と分離しておき、後〔の議論〕においてキリスト教文明が現代西洋文明の中でどのような位置に立つのかをより明確に知ることができるようにしたい。

もう一点、〔教会公〕報の読者に思い出してもらいたいことがある。私はここでキリスト教の要素とキリスト教ではない要素を分離するのであるが、この両者が〔互いに〕全くの無関係だと言っているのではない。その実、〔この両者は〕非常によく関わり合ってきた。ギリシアの文化とキリストの文化は互いに助け合ってきたのであり、また互いにぶつかり合ってもきた。その関係はかえって非常に密接なものである。例えば中世の時代、ギリシアの哲学もキリスト教の感化を受け、またキリスト教の説明にも用いられたため、ある人はこの時代の哲学はキリスト教の奴隷だったと言うほどである。ギリシアの建築、絵画、音楽もまたキリスト教が取り入れ、寺院の建築や、賛美歌の材料とした。キリスト教もまた、ギリシア文化の芸術に少なからぬ感化を与えた。昔のあらゆる有名な物語の題材は、大半がキリスト教の聖書に由来していたのだ。文学についても、キリスト教の感化は相当のものであった。ダンテの神曲（“Divinia Commedia”）はその一つの重要な証である。逆の方面から見ても、これらの〔キリスト教文化とギリシア文化の〕深い関係の存在を見出すことができる。ギリシアの文化は学問または理性を重視するが、キリスト教は道徳または信仰を重視する。学問を重視するものは、思想の自由を重視する。信仰を重視するものは、思想の統一を重視する。このため、種々の衝突と反対は自然に出てくる。以上のことから、我々は、ギリシアの文化とキリスト教の文化の互いの関係が少なからぬものであったことを知ることができる。

(3) 1932年9月(第570巻)、p.7。

ギリシアの文明にはまたもう一つの側面がある。すなわち、物質的方面である。この側面があるからこそ現代の科学文明が生み出されたのである。昔のギリシア人は格知を非常に重視した。彼らが理気〔道理〕を格めた方法もまた、非常に発達していた。物理、化学、数学、天文、地理、生理、心理であると問わず、〔古代ギリシア人たちは〕これらの学問を相当に追究していた。現在西洋の文明において、この側面は科学に属するのであり、〔その中で〕ギリシア人が伝授した衣鉢を継がないものはない。

この科学文明の要素こそが、現在の西洋文明の基礎を造ったのである。〔そのために〕この科学文明を西洋文明に特殊性質だと見なす者がいるほどである。それほどに顕著であり重要であるのだ。もしも科学文明を軽視すれば、〔それは〕西洋文明ではないと言うことができる。

しかし、この科学文明はギリシア人が伝えたものであったとはいえ、その実17世紀になってやっと徐々に発達してきたものである。歴史に照らしてみれば、14、5世紀以来、ヨーロッパ人はヨーロッパにいただけでは満足できなくなった。彼らの植民開拓の欲望と異邦人への伝道を望む精神は、彼らをして出て行って新しい世界を開拓させしめた。このため、当時とても幼かった文明の理気は、彼らの欲望を満足させることができなかった。科学、すなわち格物、致知の学問は、〔このような状況の中に〕生まれ出すにはおられなかった。私が思うに、格知の学問はただ人の好奇心を満足させるためだけに発達してきたのではない。より深い原因、すなわち時間と空間を征服したいという人類の欲望がなおあって、はじめて造られてきたものだ。

例えば、人が遠方に行かんとするとき、路程が千里あり、時間がかかるのだが、これがすなわち時間的、空間的隔たりである。これに勝るためには、より優れた機器〔によって〕交通をより便利にしてゆくしかない。汽船、汽車、飛行機はすなわちそのようにして発達してきた。人が長生きしたいと思えば、これは時間的な問題である。医術、衛生、薬学はすなわちそのようにして生まれ出てきた。西国人は東洋人に比べて早くからこの欲望、及び進歩の精神を持つようになったため、東洋人よりも早くからこの格物致知の学問を究めてきたのだ。今、彼らの追究による果実は、現在すべて我々の目の前にある。人類が科学によってどれほど利便を得てきたのか、その生活が科学によってどれほど改革されてきたのか、その思想が科学によってどれほど解放されてきたのか、これらについて私はここでは詳細には議論すまい。およそ科学のなかった時代の台湾と、科学のある時代の台湾を生きてきた人は、〔これらのことは〕すべて自身で経験してきてお分かりだろう。ここではまず、西洋文明における要素にはこの点〔物質的方面〕があるということを紹介しておき、後にキリスト教文明を論じるときの伏線としておくことで充分だろう。

(4) 1932年10月（第571巻）、p.8。

西洋文明における二つの要素、すなわちゲルマン文化とギリシア文化については、既にだいたいにおいて明らかにしてきた。残っているのは、この小論文の中心点であるキリスト教の文明、もしくはヘブライ文化である。

さてキリスト教の文明とは何であるのか？一言で簡単に説明すれば、それは「キリスト教の精神から発生したあらゆる文化的産物」とあると言える。これがキリスト教文明の定義である。この定義については、〔次の〕二つの切り口から考えることができる。すなわち

1. キリスト教の精神とは何か？
2. これ〔キリスト教の精神〕が生み出した文化的産物とは何か？

キリスト教の精神とは、その根本について考えてみれば、キリストの精神でもあるということとは言うまでもない。しかし、ここで「キリストの精神」と言わず、「キリスト教の精神」と言うことには、〔後者には〕より広い意味がある〔からである〕。主イエス・キリストが教を設立して以来、1900年以上の歴史を経てきた。教会は地上に満ちていった。教派もまた千差万別であり、非常に多くの種類がある。歴史的且つ地理的な原因により、キリストの教えと彼の救いと贖罪の業の中には、既にさらに多くの「人の社会」の要素が加わった。したがってより広いものとしての「キリスト教の精神」と言う。

さてキリスト教の精神とは何か？私が思うに、その中には5つの最も重要な要素があり、それらとは、(1)神の観念、(2)罪の観念、(3)自己否定の観念、(4)積極的道德の観念、そして(5)人類愛の観念である。以下では、この5つの意味を簡単に説明しよう。ただ、〔教会公〕報の読者には、詳細な説明を期待しないでもらいたい。なぜなら私は〔教会公〕報の読者の大半がキリスト教徒であり、ここで私の詳細な説明を必要としておらず、私が言わんとしていることの意味を既にだいたいご存知であろうということを知っているからだ。また〔教会公〕報の読者には、キリスト教の精神をこれらのことだけで言えるのかと思う人がいるかもしれない。その実、私はここでは最も重要な点、及び後に議論したい文化的産物〔の問題〕に深く関わる点のみを選び出し、論じているにすぎない。

(5) 1932年11月（第572巻）、p.8。

1. 神の観念

限りある人生によって自分の無限の前世と後世をおしはかり、有限の頭脳によって巨大な宇宙の秩序と目的を追究しようとする。これは人には絶対に出来ないことである。このために、人は自らの微弱さ、無力さ、有限性を感じれば感じるほど、人以外に、宇宙を創造し、万物を管理し、人の運命を支配する一人の「超人」（Superhuman）が必ずいるのだと考えるようになる。これがすなわち人の心の中に自然に生まれてくる「上帝」または「神」の観念の本質である。しかし、これらの観念の本質は相通ずるものであるとは言え、その名称は様々である。儒教ではこれを「天」または「上帝」と呼び、佛教ではこれを「仏陀」と呼び、日本人はこれ

を「カミ」と呼び、欧米人はこれを「God」と呼ぶ。このことは、この〔一つの〕観念に関する異なる名称が存在していることを証明している。

名称が異なるだけではなく、その本質から派生してきた内容、あるいは属性 (attribute) もまた様々である。中国の儒教は、「天」は大まかに三つの重要な意味、すなわち(1)憐憫 (昊天)、(2)正義 (昊天)、(3)【有色相】 (蒼天) といった意味を持つとしている。佛教の仏陀は慈悲という二つの文字によって包括される。日本人の「カミ」には非常に多くの種類があるので、「カミガミ」とも言われる。この「カミ」と人とは非常に近接し合っている。およそ人が持っている性情をカミもすべて持ち、嫉妬までも持っている。争いや恋愛のたぐいも〔持つのであり、〕ギリシア人の神とほぼ似ている。欧米人が「God」とするものだけがキリスト教伝来のものである。それ以外でキリスト教に比較的に近いものを探せば、中国儒教の「天」を用いることができるだろう。

さてキリスト教の「上帝」あるいは「神」とは何か？宇宙万物の主宰であるだけではなく、上に述べてきた宗教に比較して、あるいは世のすべての宗教に比較して、その内容、あるいは属性は、非常に完備され、且つ明白である。また完全な道徳性を含んでいる。キリスト教の「神」の道徳性について論じれば、〔それは〕大まかに言って、旧約の正義の神と新約の愛の神が結成したものであると言える。しかし旧約時代の神は、ヘブライ人の「選民」(選ばれた民) 思想による制約を受け、特殊性を持つに至った。しかし新約時代になると、キリスト・イエスのこの言葉「行って福音を伝え、すべての民を弟子にしなさい」という遺訓によって、旧約時代のような特殊性は自然に消滅し、普遍的な神になり、また世界のすべての人の「天父」となった。

(6) 1932年12月(第573巻)、pp.9-10。

II. 罪、自己否定、仲保、人類愛、これらの観念：－

神の超人的観念が成立し、これを出発点として、罪、自己否定、仲保観、及び人類愛などの観念が自然に生まれて来た。

さきほど述べた神、この神と人、及び「私」にはどのような関係があるのか？「私」は^{かれ}袖を認めるのか？袖を礼拝するのか？袖が私の起源であると認めるのか？これらの問題の答えが書き出されなければ、〔それは〕すなわち罪、キリスト教が述べるところの罪である。

罪の観念とはキリスト教だけが持っているものではない。他の宗教、及び宗教を持たない人も持っている。しかし相違が存在する。他の宗教、あるいは宗教を持たない人が教える罪観では、単に人が人間の定めた道徳律に背くことを罪だとする。だがキリスト教はもう一步踏み込み、唯一の真の神を信じないことを罪であるとする。したがってあなたがいかに法律を守り、道徳を実践しても、聖人、賢人の様に一生を生きても、世の人の中で、あるいは良い人だとみなされたとしても、キリスト教の前では「罪人」である。なぜならその人は心霊上、神を認めないという罪を犯したからである。

さて、神はあれほど真で、あれほど善であり、あれほど美である。人、あるいは「私」はまた、これほど偽りに満ち、これほど悪く、これほど醜い。〔ここで〕もう一步踏み込むことによって生まれてくるのが、すなわち自己否定の観念であり、自らをまったくの「無」として考えることである。自分が無であればあるほど、神は完全である。また神が完全であればあるほど、自分は無である。自己否定の観念は、神は完全であるという観念と同時進行のものであり、比例していると言うこともできる。また第一に注意すべきことは、自己が無であればあるほど、神を慕う心はより強くなってゆくということだ。自己に5分の重さがあるとすれば、神を慕う心もまた5分の重さしかないと言える。自分を1分と見れば、神には9分あると考える。自己には全然ないと見て、0という一文字に至れば、〔神を〕慕う心は10分いっぱいになる。

さて最も醜いこの自分は、神を信じないという大きな罪を犯したこの自分は、どうすればこの慕っている神と仲直りすることができるのか？自己と神の間に、越えたくても越えられない大きな溝があるかのようだ。ここにまさにキリスト教における最も重要な「契機」が存在する。すなわち「仲保」の観念である。これは他の宗教には存在しないものであり、またまさにキリスト教の特質である。上に述べたこの大きな溝は、普通一般の宗教であれば「修行」、善行によって越えることができるとされる。修行、善行を通して、自分が慕い、敬う対象と互いに和解できる。しかしキリスト教の教えではここに大きな差が存在する。すなわち、ある手続きを経なければならぬのである。この手続きとは何か？それは「仲保者キリスト・イエスを信じる」ことである。「神が独り子を世にお与えになり、彼を信じるものが滅ばず、永遠の生命を与えることができるように」。この聖書の言葉はちょうど先ほど述べた手続きを示している。ただこの手続きを経るだけで、すなわちただイエスを信じるだけで、大罪人もその人が慕う神と仲直りできるのである。人が赦すことが出来ない者を、神は赦すのである。さきほどの「修行」、「善行」では人には赦されるかもしれないが、神は赦さないのである。キリスト教の言うところのこのシンプルな「福音」の中心点とは、すなわちここにある。キリスト教の言うところのこのシンプルな「恵み」の道理もまた、ここにある。この道理をわからなければ、またこの手続きを体験しなければ、世の人々に人格がある、あるいは非常に大きな貢献をした人だといくら思われても、神の前では義だと認められない。これがキリスト教の根本精神である。

(7) 1933年1月（第574巻）、pp.9-10。

これまで神、人の罪、自己否定、仲保者イエスなどの観念について述べてきた。ここで続けて説明したいのは、キリスト教の根本精神の残り二つ、すなわちキリスト教の道徳美と人類愛という二つの観念についてだ。

キリスト教徒の道徳美を論じれば、その目的は聖潔にある。聖潔というこの二文字からは、キリスト教の道徳観念と普通の道徳観念の間に大きな相違があることがわかる。普通の道徳律は、孝行者である、年齢相応の礼儀を守っている、欲張りじゃない、だますことなく、盗まない、などなどであるとを問わず、これらの戒律、または律法は、人が人の本分を尽くしている

にすぎない。だがキリスト教の道德観はもう一方踏み込んだものであり、天道を尽くし、その上で人道を尽くそうとするものである。

キリストの教えによれば〔この〕二つの戒律とはすなわち、(1)あたなの主である神を愛せよ。(2)人を自分のように愛せよ、である。この道德観と普通の道德観を比較すれば、キリスト教は〔実は〕何歩も踏み込んでいることがわかる；

(1)キリスト教では神を愛せよとしているが、〔これは〕普通の〔道德観〕にはない。

(2)キリスト教の言うところの「人を自分のように愛せよ」を、普通の道德観が言うところの「こうこうしてはいけない」と比べると、非常に積極的である。

(3)キリスト教はその上、善行や、人を愛することの起源を、神を愛することに帰するものである。換言すれば、神を愛することで初めて人を愛するということである。だが普通の律法では、このような善行の原動力について触れられたことはなく、「良心」という曖昧な二文字があるだけである。総じて言えば、普通は「人道的であることが、すなわち道德だ」と言われる。だがキリスト教の道德、聖潔の道德は、そうではない。神を愛することで、はじめて人を愛することができるとするのであり、この二種類を兼ね備えることではじめて聖潔となるとするのである。

もう一点は、「人類愛」についてである。上に既に述べたようにキリスト教の人道とは「人を愛する」ことである。しかし、キリスト教が言うところの人を愛することと、普通の道德の言うその範囲との間にも、大きな差異が存在する。キリスト教の隣人愛とは「博愛」であり、広くは神が愛する「全世界」にも及ぶ。孔子の道理は愛ということばを論じる上で、「仁」という字を用いてその意味を含ませた。しかし孔子が言うところの「仁」とは、差別のある愛であり、そのため「愛に差等有り」と言うのである。韓文公〔韓愈〕もまた解釈して言うに、「博く愛する之れを仁と謂う」。総じて、これは儒教を信じる者に特別な見解である。私が思うに、韓文公もまた曖昧にしか話しておらず、どこまで博であるのか、〔つまり〕どこまで広くなのかを述べていない。このため、「仁」という言葉の愛とキリスト教の愛の範囲は異なっている。愛には、すでに差等があり、自分を愛するのと隣人を愛するのは違ったことである。家族を愛することと郷里を愛することも違う。郷里を愛するのと国を愛するのと同じではない。自国を愛するのと他国を愛するのでも違っている。敵までも愛するべきである、この言葉は儒教の中には見られない。だがキリスト教の愛とは、(1)広く全世界に、敵にまでも及ぶのであり、(2)その性質は、自分であるかのように愛することである。これは他の宗教には無いものだ。最も似ているものは、佛教であると言えよう。しかし、キリスト教の愛、または人類愛は、非常に強い根拠を持つ。なぜ「人を自分のように愛せよ」と言うのか？なぜならすべての人は皆、キリストの仲保において神の子どもだからである。理路整然だ。そもそも！ゆえに、「人類愛」とはキリスト教の根本精神であり、その特質である。

さて私はこれまでにキリスト教の根本精神を大まかに説明し終えた。しかし、それでキリスト教のすべての道理を含む〔議論をしてきた〕というのではない。〔ここでは〕単にこれらの要点を記し、また、これから述べようと思うキリスト教文明の原動力に関する大略を説明する

にとどめている。繰り返せば、キリスト教の根本精神は、(1)神、(2)罪、(3)自己否定、(4)仲保、(5)道徳美、(6)人類愛である。これらが、キリスト教文明の原動力である。読者各位にはこれを憶えてもらって、あとに続く文明史の伏線としてもらうことを希望する。以下では、直接キリスト教の文明史について述べたい。

筆者はここで少し筆を休めて、皆さんにクリスマスと新年おめでとうと言いたい。

(8) 1933年2月(第575巻)、pp.10-11。

文明の発生とその文明の創造者の宇宙観、及び人生観は非常に密接に関わり合っている。これについては既に上に論じてきた。さて、キリスト教の文明が一番最初に発生したのはヨーロッパにおいてであった。したがって、我々はまずヨーロッパ人の人生観と宇宙観を見る必要がある。初代及び中世のヨーロッパ人の人生観、及び宇宙観は、二つの潮流によって支配されていた。すなわちヘブライ主義とギリシア主義の二つの潮流である。総じて、この二つの主義の人生観と宇宙観は、いくつもの共通点があるとはいえ、非常にはっきりと相反する点も有している。

一言で言えば、ギリシア主義の人生観と宇宙観は、この世を重視する。ギリシア人の人生、彼らの努力と理想は、この世界を真実の世界に、良い世界に、最も美しい世界に変えることにより、この世界に暮らしている人たちが皆幸せになることを目指した。ギリシア主義から発生した文化を見れば、例えば美術、哲学、宗教、文学などを見れば、彼らの理想がこの世にあり、この世を重視していることがわかる。換言すれば、ギリシア主義とは「現世主義」である。

しかしヘブライ主義は、ちょうど逆である。ヘブライ主義の文明、あるいはキリスト教の文明が主張する人生観、及び宇宙観は、一言で言えば「来世主義」である。ここで、私が述べてきたいくつかのキリスト教の精神を見れば、その中には罪の観念、自己否定の観念、仲保の観念、救いと贖罪の観念があったが、これらでキリスト教の人生観が重視するものが「来世」であり、この世ではないことを示さないものはない。キリスト教主義はこの世をあらゆる罪に満ちたもの、ここに住む人が幸せを得られるところではないとみなす。永遠の幸せは、別の世界にある。この世界の人が努力して行うことは、あの別の世界を得るための手段を準備しているにすぎない。パウロの神学は、皆さんは既にすべて知っているのだから私はここで詳細に説明する必要はないが、すなわち「霊」と「肉」を区別する二元論である。「霊」あるいは靈魂と「肉」すなわち肉体はつねに互いに反対し合い、互いに戦い、人や人生の種々の苦しみを生み出す。「肉」に属するものは、罪、失敗、死である。「霊」に属するものは、聖潔、勝利、永遠の生命である。「肉」とはこの世に属し、「霊」はあの世に属する。したがって〔その〕人生の理想は、人を最後には勝利に至らせ、聖潔なものとし、永遠に生きるものとする、あの霊の世界を重視することであり、墮落して、罪に満ちた、人を死に至らせるこの世のために、しきりに骨を折って頑張ることではない。このような人生観が建設してきた文明は当然、あのこの世を重視する人生観が建設してきた文明との間に、徹底的な差を持つことは免れない。当然、

今こうして我々の目の前に並べられた、古代に発生したこの二種類の相反する文明、すなわちギリシア文明とヘブライ文明の果実もまた、〔互いに〕大きな違いを持つ。

ギリシア文明から発生した音楽は、非宗教的である。キリスト教文明から発生した音楽は賛美歌であり、宗教的である。ギリシア文明から発生した美術は肉体を礼賛し、力を礼賛する。ヘブライ文明から発生した美術は、靈魂を礼賛し、精神の象徴を表現する。ギリシア文明から発達した文学は人生の現象を主題にする。ヘブライ文明が作り出した文学は、聖書を用い、宗教的なテーマを題材とする。ギリシア文明が創造した思想は哲学であり、格物致知を重視する。ヘブライ文明が創造した思想は神学であり、靈魂の懺悔を重視する。ギリシア文明の建築からは、この世に属する栄光を見出すことができる。だがヘブライ文明から発生した建築は、神に捧げる神殿である。これらはこの二つの文明の対照を大略的に述べたものに過ぎない。

その他、政治、法律などなど、おおよそ文明の産物とみられるもので、この二つの文明の相反する点を現さないものはない。

(9) 1933年4月(第577巻)、pp.10-11。

我々はこれまでに、ヨーロッパにおけるこの二つの対照的な文明の潮流の歴史的進行を大まかに見てきた。一方は「霊」を重視し、もう一方は「肉」を重視する。一方は「来世」を重視し、もう一方は「現世」を重視する。一方はキリスト教文明であり、もう一方はギリシア文明である。しかし、この二つの文明の潮流は、西洋の歴史において〔つねに〕均衡な勢力〔を保ちながら〕進んできたのではない。あるときは甲の勢力が乙の勢力よりも強く、乙を圧倒することもあった。あるときは乙の勢力が甲よりも強く、甲を圧倒したときもあった。ついでに言えば、我々人間のこの世界の歴史では、似たような現象が起きた場所も存在してきた。我々も一生の間に、あるときは「霊」を重視する時代があり、あるときは「肉」に注意を向ける時代がある。あるときには「この世」に心が傾くが、あるときには「あの世」のことを考えている。パウロの霊肉二元論は、すなわちこの側面の真理を表している。一人の人間の歴史がこのようであるのだから、一つの国家、あるいは一つの民族の歴史もまたそうである。

キリスト教がローマ帝国に入った後、すなわち西暦一世紀の半ば以後から西暦13、4世紀にいたるまで、千年以上の間、ヨーロッパの歴史はキリスト教文明の支配を受けたと言える。換言すれば、文明の主潮流がキリスト教文明であったと言うことだ。ギリシア文明はそれに従属しているだけであった。学術、芸術、思想、信仰、及び政治、道徳、風俗、習慣などなどの社会上の現象であると問わず、一切がキリスト教文明の表現であり、ひとつもキリスト教と関わらなかったものはないと言える。宗教上のことは、言うに及ばず。当時の教皇、神父は学術の専売特許者であった。当時の教会堂はすべての芸術の精華が集まる場所であった。風俗、習慣はキリスト教が作り出していた。道徳、政治、法律はキリスト教が規定していた。ギリシア文明は、このため、キリスト教という大樹に覆われ影の中にあつたと例えることができる。これは中世ヨーロッパで千年以上の間〔つづいた〕ことだ。

言うなれば、この時代は既に精神を重視し、靈魂を重視する時代であった。それは良いことではないか？なぜ後で変わってしまったのだろうか？このことには大きな原因が存在する。言うまでもなく、一面では、それは人の人情が自然に変わってゆくことのためであるが、それ以外にも、経済上、及び宗教思想上の大きな問題が存在していた。なぜ経済上の問題に言及するのか？東方の人は西方のことにあまり同情できない。なぜなら、東方の人が暮らすところは天然資源が非常に豊富で、充足しており、少しの労力で自然の養いを受けることができるからだ。だが西方の人が自然の資源から受ける恵みは比較的に見ればずいぶん少なく、このため、そこ〔に暮らす〕人には二つの道しかなかった。すなわちこの世界のことを諦めて、精神主義を徹底するのか、あるいはこの世界を望み、物質主義を徹底させるかである。この時代、ちょうど民族が経済的圧迫を受ける時代にいたり、自然にギリシア文明の物質主義の方面へと方向転換したのである。またもう一つは宗教思想の問題である。在来の宗教権威主義が長い間つづき、種々の弊害が現れてきた。ちょうど水がもともとはきれいだったのに、流れなかった為にあらゆる種類のゴミが発生したのと同じである。これらの原因のため、良しにつけ悪しきにつけ、13、4世紀の近代文明と、それ以前の主流とは異なる文明が発生し、ヨーロッパの歴史上の色彩が塗り替えられたのである。

まず思想上から見て、またこれまで〔と比較して〕最も変化があったのが、「人文主義」の出現だ。この人文主義の出現を、「文芸復古 (Renaissance)」の時代と呼ぶ。なぜ人文主義を文芸復古と言うのか？それは、人文主義が重視するものが、これまでキリスト教文明によって見えなくされてきたギリシア文明の遺産を探し出し、昔まだキリスト教がなかった頃のギリシア主義を復興させることだからである。このため、〔人文主義は〕一面では、当時の宗教家の独占を受けていた学問上の専売特許権を解放して一般の学者の手に帰し、また一面では、ギリシアの古典をもう一度探求し、その真髄をもう一度研究することで思想をより自由にした。この運動の結果はどのようなものであるのか？考えなくともわかる、すなわちギリシア主義がこれまでのキリスト教文明と入れ替わり、歴史上の舞台にのぼり、主人公にならんとしている。これまで一般の人生を支配してきた「霊」を重視する禁欲的なキリスト教文明は、現世主義のギリシア文明の人生観と入れ替わらずを得ず、〔ギリシア文明は〕当時の思想上の主役になった。

(10) 1933年5月(第578巻)、pp.10-11。

我々はこれまでにこの二つの主義、すなわちキリスト教主義とギリシア主義の対立について見てきた。また新興ギリシア主義、すなわち人文主義が、しだいに優勢になろうとしていることを見てきた。このため、これまでのヘブライ文明、すなわちキリスト教文明は、しだいに保守的になり、一千年以上以来の信仰伝統、道徳、習慣が建設してきた砦を固守しようとするようになった。ちょうどこれに相反する相手であるこの世のギリシア主義、すなわち人文主義は、自然に進歩的、または「進取的」とも言える地位を持つようになっていった。13、4世紀から18、9世紀の現代にいたるまで、科学は非常に発達し、船で新しい土地に行き、自然の宝庫を

開拓し、近代立憲政治の国家を建設し、植民地に帝国主義を設立してきた。これらのヨーロッパの種々の活動は、在来のキリスト教文明の影響をまったく受けていないと言うことはできないが、実際〔その〕大半はこのギリシア主義の興隆が結んだ歴史的果実なのである。

ギリシア主義の思想は、単に物質上の新世界を出現させただけでなく、キリスト教文明の精神的陣営の中にも入り込んでいった。近代キリスト教会において発生した種々の有形無形の革命、たとえばマルティン・ルター、カルヴァンなどの宗教改革は、有形の社会的、または組織的改革であった。その他、宗教思想上の改革では、信仰と理性をより接近させる改革、たとえばあの新人文主義を高等批評する傾向までもがでてきた。これは無形の思想上の革命である。

あるいは、宗教改革以来、キリスト教に種々の新しい宗派が発生したのは進歩ではないか、なぜ「保守」だと言うのか？と反対したい人がいるかもしれない。私が見るところ、教会は組織的に進歩したかのように見えるが、その実は保守的である。なぜなら、宗教改革の真の精神は人文主義の影響を受けたのであり、〔それは〕畢竟「復興」の精神だからである。復興とは、昔の原始キリスト教を復活させることであるので、保守と言えるのである。こう言って許容されるかどうかはわからないが、宗教の生命は元来、保守にあるのだと付け加えたい。宗教がこの保守の態度を失い、進歩し過ぎれば、本来の姿を失うのである。

総じて、現代のキリスト教文明は実質的には保守的であるとは言え、その伝道の範囲、または教会員の人数から見れば、明らかにこれまでには望んでも達成できなかったような新しい世界が開けたのである。これが、この近代になってはじめて発生したキリスト教伝道の大事業である。換言すれば、キリスト教文明が植民地の大事業を開拓したのである。最も興味深いことは、このキリスト教文明が外国で宣教を行おうとするとき、ちょうど上に述べてきたような科学の進歩、新世界の発見、また帝国主義の拡張が同時に進行し、またちょうど同程度にうまくいったということである。ときには伝道をするを動機として、まず新世界を開拓し、後から帝国主義の国旗が来てその物質的宝庫を開拓するということがある。またときには帝国主義の国旗がまずたどり着き、それからキリスト教の聖書が入ってくるということもある。このような平行現象のために、キリスト教は、少なくとも東洋伝道においては、ヨーロッパかアメリカの帝国主義の手下なのではないかと疑いをもって言われることとなった。〔実際に〕そうであるのか、あるいはそうではないのか〔という問題について〕は、歴史研究者は自然に、心を落ち着けてその原因と結果を調べたいと思うのである。

(11) 1933年6月(第579巻)、pp.10-11。

キリスト教の異邦伝道は、近代になってから始まったものではない。キリスト教が存在して以来、異邦伝道は存在してきた。キリスト教の歴史とは、すなわち異邦伝道の歴史である。「あなたがたは行って福音を伝えなさい」というイエスの遺言は、キリスト教の異邦伝道の歴史の出発点である。当時のローマ帝国の巨大な版図を利用して、多くの教会を異邦に設立し、〔それは〕近代英国の宣教師のインドとアフリカでの伝道を彷彿とさせ、ほぼ同じと言える。当時ヨーロッパの北部、英国に及ぶまで、そうやって道理を得て行ったのだった。そのため、近代

キリスト教の異邦伝道について、それをもっぱら帝国主義の爪牙だ、手先だと言うのは、無知によるのであれ意図的にであれ、歴史的事実を無視して揣摩臆測するような議論であり、反駁する価値もない。歴史上では、因果関係のない二つの事実が同時に進行交差し、あたかも因果関係があるかのように見なされてしまうことが常にある。帝国主義の版図拡張とキリスト教の異邦伝道の関係は、だいたいにおいてそのようなものだ。ましてや、このような議論の多くは中国から発信され、多種多様の非常に複雑な国際的、政治的事情もまた存在している。〔これらの事情に〕多くの共感すべき点もまたあるが、本文とはあまり関連しないことから、ここでは詳細には説明すまい。

本文の議論の要点は、キリスト教の異邦伝道と文明の普及、建設、交錯といった点に重点を置く。この4、500年前をみれば、キリスト教文明がヨーロッパ北部の民族の間に入った時、彼らのもとからあった文明は非常に幼く、彼らの道徳思想は非常に単純で、彼らの精神生活は非常に不足していた。キリスト教の洗礼を受けた後、彼らの文明は非常に開化し、彼らの道徳思想は非常に発達し、彼らの精神生活は非常に充実した。このことからキリスト教文明の感化力が大きかったこと、どこまで大きかったのかということがわかる。キリスト教は、ヨーロッパ北部の民族の精神生活の皮膚となり、骨となり、心肝となった。

現在、東方のまだ開化されていない国民が、キリスト教の洗礼を受けることで得たキリスト教文明の感化力もまた、このように深い。私自身〔東方の国民がキリスト教文明から受けた感化の深さを〕見たわけではなく、これはただ私がアメリカで見た黒人の人々が受けた感化〔の深さ〕から類推している。アメリカの黒人の人々は、彼らの民族的境遇からキリスト教の感化を受け入れ、その影響は十二分に満ちていると言える。彼らはもはや自分たちの宗教を持たず、自分たち固有の生活を持たず、自分たち自身の道徳思想を持たなくなった。彼らは今、精神生活であれ、道徳思想であれ、宗教観念であれ、どれをとってもキリスト教に属しないものはない。彼らのキリスト教の伝統に対する熱心さは、白人の人々〔のそれ〕よりもなお一歩強烈になったほどである。このことはキリスト教文明の伝播と感化力を推し量る上で、非常に良い例だと言える。総じて、私がここで引いた昔の北欧の民族の例、及び現在のアメリカの黒人の人々の例は、これまでの固有の文明が非常に幼かった民族の例であった。だが中国、インド、日本、朝鮮のようなこれまでキリスト教国ではなかったが、固有の民族性、固有の古い文明のある国は、キリスト教の新しい文明に接触し、種々の文化的関係、同化、反発を生み出し、そこから発生した種々の現象は、さきほど〔述べた〕二つの例とは異なるのだ。これは非常に面白い問題であり、反省の材料にすることもできる。

（12）1933年7月（第580巻）、pp.10-11。

上述の説明に照らせば、キリスト教の異邦伝道から発生した種々の文化的接触は二種類に分けることができる。第一は、キリスト教文明を受け入れる国が、まだ開化していない国である〔場合〕。昔のヨーロッパ北部の国や、現代のアフリカの種族などである。この〔場合〕、彼らの風俗、習慣、道徳、言語、政治を問わない一切がキリスト教と同化し、従来の痕跡を少し

も残していない。第二は、これとは逆に、キリスト教文明を受け入れる前から、すでに完全に旧来からの非常に発達した文化を持つ国である〔場合〕。東方のインド、中国、日本、朝鮮などといった国である。この第二の〔場合〕から発生した文化的接触（cultural contact）は、私が本文で論じたい要点である。

この文化的接触が生みだした種々の現象は、いくつかの方面に分けて観察できる；

1. 宗教上の方面
2. 道德上の方面
3. 学問上の方面
4. 政治、経済上の方面
5. 風俗、習慣上の方面

1. 宗教上の方面。前述のように、キリスト教の異邦伝道は純然に「あなた方は行って福音を伝えなさい」という言葉によって始まった。言うまでもなく、その動機は純粋に宗教上に生まれたものである。そのため宗教的方面もまた我々の問題の中心点である。総じて言えば、私はここでは次のことを言いたい。すなわち、寡聞浅学な私がここで議論または証明するのは、自然に、私が平素からよく知っている中国と日本に関することに限定されるのであり、インドや南洋といったエリアに拡大することはできないということである。これは非常に遺憾なことだ。さてキリスト教が東方の国に伝わって以来、宗教上からみれば、どのような東洋の文化的結果が生まれたのか？

第一が、すなわち東洋の神観念の大きな変化である。東洋で従来信じられてきた宗教の多くは「多神教」である。インドのバラモンは「汎神教」である。小乗仏教もまた多神教である。中国の「道教」、日本の「古神道」もまた多神教に属する。儒教が宗教であるのかどうかについては、様々な議論がある。総じて、私が見るに、既に祭祀があり、廟宇があり、神位〔神棚〕がある〔ので〕、宗教の一種と見て差し支えないだろう。儒教の中心を論じると、それは元来「敬天」の思想である。「一神教」〔の角度〕から見れば、〔適応する〕こともできる。総じて、儒教は「天」に仕えているほか、また「后土」、「社稷の神」にも仕えるものであり、また恩に報いるために、国家に貢献ある者や民族の祖先を奉るものでもある。これもまた一種の「多神教」と見ることができる。したがって東洋の種々の宗教とキリスト教の神観には大きな相違があることがわかる。当然、「私以外に別の神があってはならない」〔とする〕このキリスト教が入ってきて、東洋人の神の観念に非常に大きな革命が起きた。神の人数が違うだけでなく、神の本質もまた大きく変化した。元来、東方の人が崇めた神と昔のギリシア人が崇めた神は大同小異である。一言で言えば、東洋人が仕える神は人の〔特性〕に属する神である。それは相対的な神である。それは特殊性を持つ神である。東方の神には分業がある。あるものはある場所の陰陽、賞善罰悪を管理する。ある神はある場所の自然現象を司り、善を祝福し悪に禍をもたらす。ある神は船乗りの守護者である。ある神は農夫の守護神である。ある神の霊顯はある一つの宗族、ある一族の中に限定される。ある神の顕聖はただ一つの国にだけ、一つの民族にだけ機能がある。ついには、専門的に出産、医療、博打打ちの保護、売春宿を守るな

どなどの神が存在するにいたる。これは明らかに我々の信じるキリスト教の神の絶対、普遍とは非常に異なる。キリスト教の神には賞善罰悪の正義があるだけではなく、霊を救い贖罪する愛情がある。東洋の神は、神人対立であり、キリスト教の神は神人が親しい。これはキリスト教の神観の東洋の古い文化、国に対する貢献の中でも最も重要な点である。

(13) 1933年8月(第581巻)、pp.10-11。

第二に、宗教上から見れば、キリスト教が東洋の文化に貢献した第二の点とは、すなわち贖罪の観念である。東方の宗教は従来はこの贖罪の観念を全然持っていなかったというわけではない。いかなる宗教も、その教えや祭祀の中に贖罪の意味を多少含んでいると言うことができる。ここでは、東洋の国の宗教にある贖罪観を二つに分けて見てゆく。すなわち(1)物質的、(2)精神的、〔の二点〕である。

(1)第一の物質的な贖罪観とは、低級の、通俗的宗教に比較的属するものである。なぜ「物質的」だと言うのか？それはすなわち、物質を神に捧げ、その恩典を求め、過去の罪状への譴責を免れる観念〔だから〕である。中国の道教が仕える各種の神は、すべてこの贖罪の意味をその内部に含んでいる。したがってそれらの祭祀もまた非常に物質的である。例えば金銀の紙を燃やし、提灯を張って布飾りを結びつける、豚の頭や五牲〔鶏、鴨、豚、羊、魚などの5種類の生贄〕を供える。これらすべてには、過去に神に対して罪を犯し、譴責を受けることを恐れ、赦免を求めようとする意図が含まれていると言える。宗教を信じる人民の知識の程度が〔低い〕ほど、この物質的な贖罪観は強い。彼らの考えによれば、彼らが捧げる物質の多少は、彼らが赦免される程度の大小の尺度にすることができる。このような贖罪観は東洋の宗教に限定されない。キリスト教の前身、すなわちユダヤ教にもまたこのようなことがあった。したがって預言者はこのような観念を取り除きたいと思い、「私は憐憫を求める、祭祀は求めない」と述べて神ヤホバを表明し、その重視する祭祀とは精神であって物質ではないとした。ユダヤ教だけではない。中世時代の旧教、天主教にもまたこのようなことがあった。すなわち献金が多いほど、赦される程度がより高いという。言うまでもなく、これは非常にキリスト教の本来の宗旨に合わなかったため、このような贖罪観の流行はルターの宗教改革の一つの大きな動機となった。

(2)第二の精神的〔な贖罪観〕は、非常にキリスト教の贖罪の意味に近い。東洋の宗教から見れば、この観念を持つものは、中国の儒教、日本の古神道と大乘仏教にある。

さてまず日本の古神道を紹介しよう。台湾人の多くはこの宗教の祭祀の意味がわからない。彼らの祭祀を見れば、供え物を捧げるとは言え、重視するのは供え物の清潔であり、供え物の多寡ではない。その捧げものはすべて清のものに属する。これは彼らの自然神〔の考え〕の結果である。その祭祀は最初から最後まですべて清めの考えにある。祭典の始めには「お祓い」(修祓)の儀式がある。これは神の前にこれから立つ人を清める儀礼である。その意味はさきに過去の汚れを清め落とすことでやっと神の前に立って恥ずかしくないということである。一

言で言えば、古神道の精神とは清めの考えを重視する。これは彼らの贖罪観の表現であり、その贖罪観が精神的であることを証明する。

中国の儒教の贖罪観もまた精神的である。孔子曰く「罪を天に獲れば、禱る所なきなり〔天に対して罪があれば、祈ることができない〕」。この言葉の意味とは、人の精神が清らかであってはじめて天に〔とどく〕ことができるということである。そうでなければ、供え物をいくら捧げても、罪を赦されないということだ。孔子は祈りの考えを完全に拒絶したのだと解釈して言うてはならない。なぜなら彼は「私の祈りは長い!」と言ったこともあるのだから。しかし儒教の贖罪観の大半は政治的な意味を持つ。孔子以前の「先王」は、皆政治的な贖罪の思想を持っていた。彼らの考えでは、人民が罪を犯し、天に罪を犯すほど、天は種々の常ならぬ自然現象を起こし、例えば飢饉、疫病、風雨の乱れによって、国君である人が諫められるべきであることを示す。国君が名君であれば、そのような〔場合〕は人民に代わって罪の赦しを求めねばならない。求める方法は生け贄であるとはいえ、大事なものは国君あるいは天子が、すべての民のために切迫的に赦免を求め、彼自身を通して、すべての民の罪を受けねばならない〔点である〕。彼の祈りの代表的な言葉は、「民に罪があれば、私一人が彼らのために〔それを〕背負う。もしも私に罪があれば、すべての民を巻き添えにはしてはいけない」。このことから、儒教の根本思想というものは、天子が民に代わって天に対して〔行う〕贖罪観であるとわかり、それは非常に精神的なものであると言える。

佛教の贖罪観とは、先の二種類との大きな違いがあるとは言え、それでも非常に精神的である。佛教は「因果律」を重視するので、その贖罪観は比較的に希薄だ。因果律とは、なになにをすれば、自然になにになにのようなことになる、逃れることはできない、という考えである。逃れるには、すなわち償いを得るためには、一つの道しかない。すなわち仏を崇め、過去の一切の人情、物欲、すべてを断ち切り、世間を離れ、出家修行して、やっとすべての罪状を贖うことができる。しかしここに「小乗」と「大乘」の違いが存在する。小乗は多くの苦難、修行、苦しみを経て、やっと救いを得る、すなわち「解脱」を得る〔とする〕。だが「大乘」はそうではない。「大乘」は「畜生成仏」を用いる。この時に「帰依」をして、この時に「解脱」を得るのである〔とする〕。また捧げ者を重視せず、「行」すなわち行為、行い、修行の考えを重視する。これもまた明確に精神的な贖罪観である。

さてキリスト教の贖罪観一つ一つをこの東洋旧来の贖罪観と対比すれば、キリスト教の東洋の宗教に対する貢献がどれほど大きいのか明確にわかる。

まず、あの物質的贖罪観から対比しよう。キリスト教の贖罪観とこれはちょうど正反対である。一方の神は相対的であり、したがって賄賂を受け取ることができる。一方の神は絶対であり、したがって憐憫を重視し、祭祀を重視しない。一方は「行いを禁じ、つつしむ」の法律観念から出てきた思想であり、一方は「信じれば救われる」という恵みの福音から結実したものである。一方は「お金があれば鬼も粉挽きをしてくれる」の黄金万能主義の人生観から出て、一方は「金持ちはかえって天国に入るのは難しい」という普遍的な正義の思想である。非常に

相反することが見て取れる。〔この〕対立から、キリスト教のこのような低級な宗教思想への補充貢献の程度がどれほどのものであるのかがわかる。

（14）1933年10月（第583巻）、pp.10-11。

これまでに既にキリスト教の贖罪観、及び東洋の物質的贖罪観を対比してきた。つづけて東洋の精神的贖罪観を比較しよう。キリスト教の贖罪観の最大の特徴は「仲保」にある。仲保があってはじめて罪の赦しがある。罪の赦しがあって初めて良心の解放がある。情理□□を備え、少しも□□な点はない。東洋の儒教にもまた仲保の思想がある。儒教の仲保とは「天子」である。天子は天にすべての民の罪の赦しを求め、そのことで天災を終わらせ、禍を免れ、国家太平、風もととのい、雨も順調になる。しかし、この贖罪観とキリスト教を比較すれば、多くの相違点がある。すなわち；

1. 儒教の贖罪は一時的であり、キリスト教の贖罪は永遠である。
2. 儒教の贖罪は国家を一体として含むが、キリスト教は個人の贖罪を重視する。
3. 儒教の贖罪はだいたいにおいて政治的なことであり、キリスト教の贖罪は主に個々人の精神に注目し、個々人の良心を解放する。

すなわちこの「良心の解放」とは贖罪の第一の根本であり、キリスト教の東洋の宗教思想への貢献の最も重要な一点である。

東洋人がもしも天性の良心を壊すということをした場合、その責苛みは譴責の有無に止まる。この譴責とは客観的なことに関わる。譴責があるとき、はじめて神に求め仏に頼る。責めが無ければそのまま平安に過ごす。さらに一步踏み込〔んで言え〕ば、すなわち良心の主観的な苦痛、及び解放された喜びは、東洋人の道徳上、宗教上の思想では、充分には明確かつ深くはない。個人がそうであるので、国家もそうだ。国家が客観的な禍、飢饉、疫病、洪水といったことがあれば、はじめて天子が祭壇を建てて捧げものをして、すべての民のために希求する。天下太平であれば、反省も、正義の観念も生まれない。一言で言えば、この東洋の贖罪観は浅薄であり、表面的な客観的な思想である。だがキリスト教の教えはそうではない。まずイエスを仲保者と信じ、それから初めて罪を赦される喜びがある。罪が赦されてはじめて良心の解放がある。良心の解放があってはじめて善行をする気力がある。精神にはそのようにして革命が生まれ、邪悪を破り、正しいことを顕す堅固な意志が生まれる。このことから非常に徹底的で主観的な贖罪観であると言える。

また現代の学説からキリスト教の贖罪観を述べてみよう。近來の心理学には「精神分析学派」というのがある。この一派が言うに、人の精神が変われば（より深刻な、すなわち発狂）、タイミングに合っていないことを話し、タイミングに合っていないことをする。これはその人が以前持っていた私欲、あるいは満足させることができなかった希望が、封じ込められたからそうなったのだという。しかし病気になったとき、あなたがその人にあの我慢していた時は、ちよどどのような原因で〔そうしたのか〕尋ねても、その人は言い出すことができず、またはよくあることは既に忘れてしまって、無意識の中に沈んでいて、言うことができない。だから、

このような症状を治療しようとするとき、精神分析を用いていつも質問して、その起源にいたるまで聞いて、すなわちそのふたをされた望みからその人を解放すれば、その人は自然によくなる。私が思うに、人が罪を犯すことは、このような変化してしまった精神病患者と大同小異である。人は生まれてからずっと天からもらった良心を備え持っている。台湾語に「天良」という言葉があるが、これはまさにぴったりの意味だ。この天良は、教育を受けたかどうかとか〔受けた教育の〕深さ浅さを問わずに、人に正義と不正義を区別させることができる。しかし一度私欲が発生し、天良をそこなうようなことをすれば、天良はまるでどんどん呪縛されてゆくかのようになる。一度でそうなのだから、二度だとさらに深刻だ。日ごとにたまって天良が呪縛される苦しみはますます重くなり、ついには言うべきではないことを言うように、行っってはならないことを行うようにまでなってしまう。最後には、天良が完全に麻痺するか、あるいは天良の譴責をいつも受けつづけるようになる。いずれにせよ、その人はまったく無力な人になってしまう。良いことをしたい、でもできない。すべきでないとわかっていることを、してしまう。あの天良を喪失したはじまりを探し続け、見つけ出すことによって解放されなければ、その人の人格は完全に破産した状態になってしまう。ここにキリスト教の贖罪観の大きな要点がある。信じる、ただただ信じるだけで、今このとき、どんな罪であろうが、どんな責めであろうが、一切が抹消され、天良がやっと解放される日となるのだ。天良が解放され、それから善行を行う力を持ち、一人の精神上病気の無い善人になる。このような贖罪観はキリスト教以外には、東洋の一切の宗教にはまったくない。したがって私は、キリスト教の贖罪観とは東洋の精神文明の方面に非常に貢献があったのだと主張する。

(つづく) [未完]

註

- 1 王昭文〈日治時期臺灣基督徒知識分子與社會運動(1920-1930年代)〉(國立成功大學歷史系博士論文、2009年)、pp.48-9。なお、日本植民地時代及び二二八事件(1947)における林茂生の社会的、政治的役割を考察した伝記として李筱峯《林茂生・陳炳和他們的時代》(玉山社、1996年)が挙げられる。
- 2 張妙娟〈《臺灣教會公報》中林茂生作品之介紹〉、《賴永祥長老史料庫》最終更新日:2015年1月7日、閲覧日:2015年1月24日、
<<http://www.laijohn.com/archives/pc/Lim/Lim,BSeng/works/tokhkp/Tiun,Bkoan.htm>>。初出は《臺灣風物》第54巻第2期(臺灣風物雜誌社、2004年6月)、pp.45-69。
- 3 Lim5 Boo7-seng [林茂生]. 'Ki-tok-kau3 Bun5-beng5 Su2-koan [基督教文明史観]'. Tai5-oan5 Kau3-hoe7 Kong-po3 [台湾教会公報]. Te7 567 Koan3, 1932 Ni5 6 Goeh8 [第567巻、1932年6月]、pp.10-11。以下、本稿では白話字表記の際には発音記号を省略し、各語の末尾に発音記号番号を付す。
- 4 Lim5 Boo7-seng [林茂生]. 'Ki-tok-kau3 Bun5-beng5 Su2-koan [基督教文明史観]'. Tai5-oan5 Kau3-hoe7 Kong-po3 [台湾教会公報]. Te7 580 Koan3, 1933 Ni5 7 Goeh8 [第580巻、1933年7月]、pp.10-11。
- 5 駒込武「植民地支配と近代教育-ある台湾人知識人の足跡- (Symposium コロニアリズムとしての教育学)」『教育思想史学会』12巻(2003年)、pp.83-96、p.89。